

# ネパールの金銀細工師宅での指輪作り

——職人としての主体とその展開の研究に向けて——

橋 健 一

## 1. はじめに

本書掲載の諸研究の母体になった「職人文化と近代化」研究会では、ネパールや日本の金属職人文化が近代化に対してどのような役割を果たしてきたのか、ということを中心の一つとしてきた。その中で、筆者は職人文化を“個々の職人が職人としての主体を形成する記憶の共有の場とその主体形成のパターン”として考え、近代という新しい場に職人達が出会う時、その職人としての主体をどのように外部化し、さらに拡張したり展開してきているのか、という問題について関心を抱いてきた。

本稿では、筆者がネパールのスナール(金銀細工師)カースト出身の友人宅に弟子入りして指輪作りを習った経験を一つの事例として取り上げ、金銀細工職人としての主体を形成する記憶共有の場である指輪作りが、どのような要素から成り立っているのかとその形成のあり方を示したい。さらに、職人としての主体がどのような状況で、どのように立ち上がるのか、日常の場でどのように展開しうるのか、いくつかの例を引いてそのあり方を提示する。

最後に日本の彫金師に今回の指輪作りの体験を話した結果得られた言説から、日本の彫金師とネパールの金銀細工師の立場と主体のあり方の差異について予備的な考察をおこなう。

## 2. スナールという人たち

いわゆる“カーストシステム”を持つと考えられるネパール社会で、スナールは、金や銀、真鍮やそれらの合金で指輪、ネックレス、ブレスレット、ペンダント、アンクレット、ピアス、鼻ピアスなどの装身具をつくる職業カーストの集団(Jat)、あるいはそのカーストに属す個人とみなされていて、大きくは鍛冶屋カースト(カミ)の一部として扱われることも少なくない。ネパールの鍛冶屋カーストとしては他にもカトマンドゥ盆地を中心としたチベット・ビルマ語系のネワール語を母語とするネワールの鍛冶屋カースト(ナカルミ)もいるが、ナカルミとは違って、インド・ヨーロッパ語系で国語のネパール語を母語とし、ネパールの東西にかけて広く居住している。カースト階層上アウトカーストに属すとされ、最近の都市化などの影響で従来ほ

どではないとはいえ、スナールは村落では他のカーストとの共食が禁止されるなど、いまだに差別的な扱いを受けているところも少なくない。ただし、同じ鍛冶屋カーストの中では、金を扱うスナールは高位のカーストに属していると考えられていて、低位とされる鍛冶屋カーストとの接触などをスナール自身が禁じることもある。スナールという名称の接頭辞は金(スン)からきているものなので、スナールは金細工師とも呼べるかもしれないが、実際には銀や真鍮など他の金属も扱うので本稿では金銀細工師とした。山村ではほとんどのスナール所帯が農業も営む。また逆に金銀細工を全くおこなわない専業農家も少なくない。商業、工業に携わる人、インドやアラブなど外国への出稼ぎに行く人も他のカーストに劣らず多いようである。

### 3. チャハラ村のスナール

指輪作りを教わったチャハラ村は、16世紀以前から栄えたパルパ郡の郡都タンセンという町から北へ約25キロの距離にあり、村人達は買い物などでタンセンまで頻繁に出かけているようである。また短大以上の教育を受けるにはタンセンまで出ていかななくてはならない。タンセンから南へ下ると、街道に面したブトゥワルという町と、インドとの国境のバイラワという町があり、この2つの町へ教育や仕事を求めて出ていく人も多い。

およそ1,600所帯をかかえるチャハラ村には30軒のスナール所帯がある。そのうち本格的に金銀細工を生計の糧としておこなっているのは14所帯である。他のスナール所帯は農業や出稼ぎで食べているという。指輪作りを教わったD家はチャハラ村の中のオモラバスという集落に属すが、約200軒程からなる集落内には全部で12軒のスナール所帯があり、その12軒のうち2軒だけが金銀細工を生計の糧としていて、D家はそのうちの1軒で、周辺では最も大きいワークショップを持っている。

### 4. アムラバスのD家

今回弟子入りをさせていただいたD家は、現在世帯主のD氏の祖父の代に隣のグルミ郡から現在の居住地であるチャハラ村に移ってきた。D家の人々によれば、もともとD家の祖先は司祭カーストのバフンで、数世帯前のある祖先がスナールの女性と結婚し、その結果カーストが下降してスナールになったとのことで、家族の中には姓としてスナール以外にもバフンの一族名を名乗っている人もいる。D氏は現在チャハラ村の区長を務めていて、行政的な区(集落にかなり重なる)のとりまとめの仕事もしているが、それ以外にも村人が病気になったときに自分たちの選挙区から選出された大臣に援助を掛け合うなど、公務的な仕事以外にも村人達のために尽力している。D家の家族にD氏が区長になった支持基盤について訊ねると「仕事ぶりがまじめでごまかしがないから、それが人々に評価されているからでしょう」と話してくれた。D氏は、4人兄弟の長男で46才、金銀細工の仕事を主に息子と2人でやっていて、顧客は延べ3,000人以上にはなろうかという。そしてこの顧客の多さはD氏の「金銀細工の技術の高さと誠実さ」からくるものだと言われる。

D氏のお父さんと次男の弟さんは以前に病気で亡くなっている。三男の弟さんは、カトマンドゥの大学で物理学の講師をしていて今は金銀細工の仕事はしていない。実はこの人は、本研究会の共同研究者であり、筆者のよき友人でもある。そして、以下に記述する弟子入りの模様の発話部分の記録も彼に多くを負っている。

四男の弟さんは、現在時折D氏の仕事を手伝ったり、農業をしているが、現在どれにもあまり力を入れず、町へ移住したがっている。

筆者は友人の長兄であるD氏に習おうと思っていたのだが、チャハラ村を訪れた時には仕事が忙しいということだったので、D氏の息子さんLakshiman君(22才)を先生にお願いすることにした。とはいえ、先生にも自分の仕事があるから、横に付いていて仕事の合間に見てもらおうということである。また弟子入りの日には、4男の弟さんも金細工をしていて、横で悪戦苦闘する筆者によく助言を下さった。

## 5. ネパールの装身具

指輪作りを習うきっかけは、カトマンドゥの知人の薦めで手相を見てもらうことから始まった。その結果、悪運を招かないようにいくつか特定の貴石をはめた指輪をする必要があるということになった。それまで筆者には彫金などの金属加工の経験は全くと言っていいほどなかったが、友人の実家が金銀細工をしていることを思い出し、何とか自分で作れないかという気になって友人に頼んでみた。結果は今ならそれほど忙しくないから大丈夫だろうとのこと。そしておよそ一ヶ月後に、指輪作りに出かけることになった。

ネパールで、筆者のような理由で装身具を身につける人は、都市では珍しくはないが、一般にはむしろ女性の日常的な装いとしてピアス(少々大きめのもの)や指輪、鼻ピアスなどが身につけられることが多い。少女から老女までピアス、鼻ピアス、ネックレスのどれもしていない女性と出会う事はこの国ではとても難しいだろうと思えるほど、装身具はネパールの女性に日常的に必要とされるものである。装身具の中でも特に金製品の人気は高く、多くの民族、カーストの結婚で婚資として使われている。こうして結婚のシーズンや服などを新調するデザインなどの大きなお祭りの前には、金銀細工の店は大変忙しい時期になる。

装身具は、オーダーメイドが基本である。レディーメイドの商品はカトマンドゥでは店に並べられているのが時折見受けられるが小さい町では殆ど見られないし、また村でも金銀細工師が持って売りにまわることがあるが、一般には客は金細工師の店に赴き、ダージリン風やラフレ(海外からの出稼ぎ帰り)風にしてくれとか、あの人の装身具のデザインと同じにしてくれと言って、特定の地方で決まったデザインや近くで見かけて気に入ったデザインを指定して作らせる。予算だけ決めてデザインはお任せということもあるが、どちらにしてもデザイン料はかからない。客が支払うのは、完成品の重量を量り金属の単価をかけた金額と、作る手間から決められたレートの手間賃だけである。

## 6. 指輪作り

### 《仕事の準備》

指輪作りのために友人とカトマンドゥを朝発ち、タンセンに一夜してからチャハラ村へジープで向かった。途中道が悪いのでジープはこまでだと降ろされ3時間程歩いてチャハラ村に着いたのは夕方4時頃だった。その日はもう遅いからということで、指輪作りは翌日に始めることになった。翌朝7時半、お茶を飲んでから家の離れにあるワークショップ(パサール:ネパール語で店の意)へ友人と向かう。この時にはもう仕事が始まっていた。

筆者:「先ず初めに何をしたらいいですか? 仕事の前に先生に挨拶したり、儀礼をしなくてもよいのでしょうか?」

先生:「まあ、習いたての人は、仕事を掃いてから土間や炉に土を塗り、金床を砥石で磨くもんですが、掃除は今日はまだ終わったから、金床を磨いて下さい」

そう言って筆者を座らせ砥石を渡してくれた。筆者は金床を磨きながら、(写真1)

筆者:「なぜ、こうやって磨かなくてはならないんですか?」

先生:「磨くと銀などのすわりが良くなって、滑って飛んでいったりしなくなるからですよ。」



写真1 金床を砥石で磨く著者、うしろでメモをとるのは友人の L. Baral 氏

しばらくして、金床がきれいになったのを見て、

先生：「次に金槌の面を両面きれいにして下さい」

筆者は、金槌の取っ手を握って磨いていたが、金槌が安定せず、なかなかうまく磨けずに四苦八苦する。すると、

4男：「金槌はこうやってゆっくり研いで下さい。後の作業が楽になりますから」といって、金槌の頭の部分を左手で掴んで研いで見せてくれた。なるほどそうやって持てば簡単である。

《鍛金作業》

こうして磨きの作業が一段落済むと、D氏が「この銀は、溶かしたものです。これをうまく叩きつぶして下さい」と言って筆者に長さ4cm、幅6,7mm程の大きさの銀塊を渡してくれた。

D氏：「きちんと4面整えて叩くんですよ」

先生は「こういう感じで叩いて」と言って、金床の上の銀を金槌でトントンと二度叩いた後、同じ金床の右端に一度カチンと叩くように金槌を置く。見ているとあっと言う間に銀の固まりが、4面を持った長細い延べ棒になっていく。

一応4面ができて延べ棒の状態になると先生から「じゃあ、これを熱して下さい」と言われ、延べ棒を渡された。

D氏：「それじゃ、炉(写真2)の火を起こして」「長いピンセットで銀を摘んで火に入れて、竹筒を掴んで火を吹いて下さい」

しばらく息を送っていると4男が「もう赤くなっただろうから、見て下さい」と言って炭の中に入れて焼き鈍した銀をピンセットでかきだして見せてくれた。

筆者：「ああ、もう赤くなりましたね」

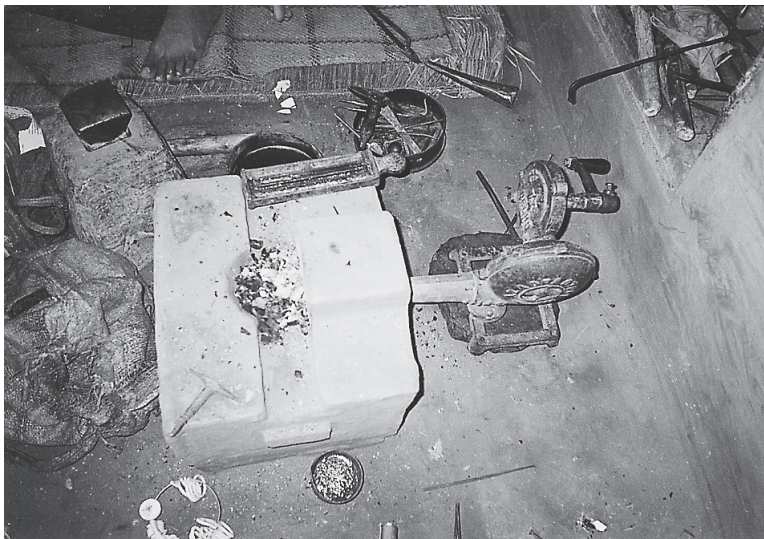


写真2 焼き鈍しに使う炉



D氏：「銀を出して水に入れて」

筆者：「はい入れました」

D氏：「じゃあ、手にとって拭いて、ゆっくりと叩いて下さい」

そう言われ金槌を渡された。いよいよ始まるんだなと、胸は高まるが、どう叩いていいのか見当も付かない。ともかく先生がさっき叩いたようにやろうと銀を金床の上でトンチンカンとぎこちなく、それでもリズムだけは一応先生の真似をして叩いてみた。すると銀はどんどん曲がってしまっ、せっかく出来た面がつぶれてしまい、あつと言う間にみすぼらしい形になってしまった。そこで裏返しにして叩いてみたり、横にして叩いてみたりしたが、銀の形は一層ひどくなっていきもうほとんど、ちぎれそうなまでになってしまった。そうこうするうちに段々と叩き方が弱々しくなつていき、リズムの何もなくなつていつてしまった。すると先生に「そういう風にトゥクトゥク(トントンという擬声語のネパール語表現)と細かく叩くんじゃなくて、もう少し長いストロークで叩いて」と言われる。

そう言われてもどンドン曲がってしまうんだからと思ひ、つい「難しいですよ」と先生に口答えをしてしまったら「これから指輪を作るんでしょう?」と言われ筆者はただ「はい」と返すしかなかった。ともかく銀を叩き続けた。それでも微妙に叩き具合を調整することと、叩き方を大きくするというは私には全く矛盾する命題のように感じられた。勿論慣れれば違ふのたろうが。先生は苦しむ筆者に銀を持つ位置を交えるようにとアドバイスしてくれた。それは銀の端を摘んだ左手を金床の左ではなく、上までまわして持つていき銀を自分対してきちんと真っ直ぐになるようにする、というものだった(写真3)。実際そうすると、なるほど少し成型しやすいような気もした。ただ、叩きの技術がない人間にはそれだけではどうしようもなかつた。



写真3 鍛金作業

結局滅茶苦茶に曲がりくねった銀は先生が直してくれた。そしてきれいに6センチ程の長さで幅3ミリ位に出来上がった銀の延べ棒を筆者に渡しながら「じゃあ、ランプの火を吹いて銀を焼き鈍して下さい」と指示した。

#### 《焼き鈍し》

筆者は早速ブドゥナル (budnal) と言われるキセル状の先の曲がったパイプをくわえて息を送りランプの火に吹きかけ、炎を手のひらにのせた木片上の銀のほうへ向けようとパイプを火から近づけたり離したりするが、炎がバツと広がってしまったり、銀まで届かなかったりで、うまくできない。先生はそれを見て「パイプはこういう風に掴んで」と私の手を取り、鷲掴みに掴んでいたのをペンを持つような持ち方に変えてくれた。

先生：「銀を木片の上に置いて、ランプの炎が銀に届くまで強く吹いて」

筆者：「はい、わかりました」

初めより強く吹き、吹き付ける方向とパイプの火に対する位置をあちこちと変えているうちに、炎をバーナーのように収斂させて、さらに手元の銀の位置を調節して炎をうまく銀に当てることができた(写真4)。やがて銀が熱せられて赤くなったのを見て、「ついにやった」と喜んでいると、先生に「ピンセットで掴んで水に入れて」と指示された。

#### 《銀の切り分け》

筆者がピンセットも思わず鷲掴みして摘んでしまうとD氏からすかさず「ピンセットの持ち方はそうじゃありませんよ」と注意された。先生にブドゥナルの時と同様に「人差し指と親指との間に挟んで」と言われて、細かい作業をするための道具はどれもペンの様に持つのが基本なのかと思った。

そして先生に言われ銀をニッパで3つに切り分ける。



写真4 ブドゥナルで火を送る。右は先生のLaksiman君。

「1つはバトルガール(石をはめ込む枠：以下石の枠)に、もう1つはタール(飾り付け用の銀線：以下銀線)に、さらに1つは足(指輪の輪の部分：以下指輪の足)にします」と先生。実はこの時初めて筆者は自分が今までしてきた作業の意味が分かったのである。ここまでは、そのまま叩いてきたものが、延ばし丸められ、そのまま指輪になるのだと思っていたのだ。

切り分けられた銀の一片を取り上げた先生は「こういう風にまた4面をつくりながら叩いてみて」と言って、やはり3拍子のリズムでトントントンと叩いて見せてくれた。

そして筆者は見よう見まねで作業を始めてみると、

先生：「そうじゃない、叩き方がまだわかっていませんね」「4つの面ができていないし。向こうにひっくり返して、そうそう、そういう風に。いやダメだそうじゃありません」

筆者：「ああ、こんなに曲がっちゃった」

先生：「向こう(4男のほう)を見て。彼がどういう風にやっているのか」

4男：「面ができていないんだよな。ほらこういう風にやって」と言って筆者の作業をやってくれる。できあがると筆者に「それじゃあ、また熱して」。

筆者がランプの火を吹き、銀を焼き鈍ししていると、D氏が「完全に熱されると赤くなった後白くなるんですよ」と教えてくれた。

先生：「もっと強く吹いて」「ああ、ダメだ、黒くなった」

筆者：「なんで黒くなってしまったんでしょうか」

一度はできたことができなくなってしまい、心細くなって訊ねると、先生は「火が弱いから煤が出て黒くなるんですよ」と言い、筆者のパイプの方向を直してくれたが、うまくできなかった。それを見るに見かねた友人は、パイプを手にとって強く息を火に吹きかけ、こうやるんだと手本を見せてくれた。それで筆者もまた見よう見まねで試行錯誤を繰り返すうちに、火を自分が意図したように吹けるようになってきた。「火を強く吹くのではなく、弱く吹くのもない、吹いた息で火を掴むような感じで、吹けばいいのか」とこの時思った。

先生：「あなたが叩き延ばした銀の棒を打ち直したけど、割れてしまいましたよ。ちゃんと叩けていなかったから」

筆者：「どうダメだったんですか？」

先生：「一面ばかり強く叩くからつぶれてしまったんですよ。こういう風に叩いてもう一度やって」と言ってまた手本を見せてくれた。

筆者が真似て叩くと、

先生：「OK、OK」

そして筆者が「ああ、また角がつぶれた」と言い、こわごわと金槌をふるうのを見て、

先生：「もっと強く叩いて」

筆者が少しずつ強く叩いていくと

先生：「OK、また強く叩くと割れるから」

しばらくそのままの感じで作業を続ける。この頃から少しストロークを大きくとって叩くこ



とと、安定させて叩くことが両立するんだということが、何となくわかってくる。実際に思い通りに叩けたわけではないが、それでも段々銀を叩いて成型するのが楽しくなってくる。そのまま3,4分叩いたところで先生が仕上げしてくれ、短く切られた銀の一片は5,6センチまで叩き延ばされた。

#### 《石の枠作り》

次に他の銀片を手に取り、先生は「これは薄く延ばして板にするんですよ。」と言ってしばらく叩いて見せてから「反対側はあなたが自分で叩いて下さい」と銀を渡してくれた。今度は4つ面を作らなくていいから、先程よりやり易そうだったと思うが、やはりなかなか思うようには行かない。

そしてまた焼き鈍しになったが、途中炎を吹きかけた息で銀が動いてしまったので、銀をピンセットで取ろうとしたが、見つけれずにきょろきょろしていると、

先生：「ピンセットはどうした?」「道具は自分の道具を使わないとダメですよ」と言いながら、筆者が使うように決められたピンセットを見つけて手渡してくれた。

またしばらく銀片を叩いて、板にする作業を続ける。

先生：「金床が遠いからもっと手前に持ってきて作業して」

4男：「右肘を(胡座をかいて立てている)右膝につけて叩いてみて下さい。そうすれば簡単にできるから」

言われるままにやってみると、叩く動作が左右にぶれ難くなって安定するのがすぐにわかった。「ああ、こんなコツがあるのか」と納得する。

こうしてストロークはいくらか安定したが、銀をなかなか真っ直ぐ叩きのばせない筆者を見て、

4男：「叩いて曲がったら、曲がった内側を叩く。そうすれば真っ直ぐになる」と板の右端を叩いて左に曲げてから、曲がった内側になる左端を叩いて右に曲げ、真っ直ぐにするのを見せてくれた。そして「さあ、やって」と道具を渡され作業を再開する。なるほど、曲がるのを前提に考えればいいのか、と左右を交互に叩くが銀は左右に曲がった。やはり真ん中を安定して叩くのが大事なのかと思う。こんなことを考えながら、左右真ん中と叩き合わせるうちに、叩いたときに銀に圧力がかかるのが、金槌の面そのものではなくて、金槌の面の傾きでできる点なのだということがわかった。そしてその点をコントロールして叩くには、金槌の面への意識が足りなかったことと、叩かれる点をもっと細かく見て確認していくことが必要なのがわかった。そして作業を続けていくと、それまでより随分銀を思い通りに叩くことができた。このまま習ってもっと点の感覚がつかめれば、何とかできるようになるかもしれない、と希望が見えてきたときに、銀板を叩き延ばす作業は終わった。

#### 《銀線作り》

次に先生は仕上げをしてから、前もって細長くしておいた銀片を取って「銀を引っ張れますか?」と訊ねてきた。

筆者：「どうやってやるんですか？」

先生は「銀の先を少し叩いて細くして、ダイスの穴に通して引っ張り、延ばすんです」と言って5×18センチほどの鉄板に大きさの異なる1ミリ前後の穴が沢山開いたダイスを見せてくれた。

そして先生は銀片をさらに細長くしてから、筆者に焼き鈍するように指示し、それが終わると、

先生：「次は(叩き延ばしてきた銀の延べ棒の)角を叩いてつぶして下さい」

筆者は早速作業を始める。今回は自分でできそうだと考えながら叩いていると、友人が「習う人は、他の人がやるのも見ないとダメじゃない」と言ってきた。

筆者：「そう言われても、今の作業も集中しなくちゃできないから…」

D氏：「そう、集中することは大切なことだよ」

角を丸め終わり焼き鈍をしたときに火の粉が手に飛び、筆者が熱がると、

先生：「そうやって、仕事を覚えていくもんですよ」

筆者は頷いて作業を続けた。

D氏が4男に「それじゃあ、(ダイスで銀を引き延ばすのを)教えなさい」と指示すると「穴のサイズを見て、初めは大きいのに入れて下さい。それから段々と小さいのに。すごく小さいのはダメだよ。引っ張ったときに切れちゃうから。きついときには油をつけて引っ張るといいんですよ」と説明しつつ叩き延ばした銀をダイスの丁度良いサイズの穴にさし込み、ヤットコで摘んで外に引き出せばいいところまでやって、それを筆者に渡してくれた。

筆者は言われるままに右手でヤットコを持って穴から少しだけ出ている銀の先を摘み、左手にダイスを持って銀を引きだそうとするが、ダイスをきちんと支えられずに引っ張り出すことができなかった。(写真5)それを見て先生は私から道具を取り上げると、ダイスを持った左手をあぐらをかいている左足の外側に回してダイスを足に押し当てて、「こうやって足に引っかけてダイスを持って、息を止めて引っ張って下さい」と教えてくれた。なるほどと教わったとおりにやってみると、今度は先ほどとは比較にならないほどスムーズに銀をダイスから引き出して延ばすことができた。が、おそらく少し太くなっていたのだろう、引き出すのに抵抗が大きくなった銀の尻尾の部分を強引に引っばると、ちぎれてしまった。しかし、大丈夫という先生達の声に支えられ、今度は少し小さい穴に入れてみる。今度は銀がククッと伸び、気持ちよく銀をダイスから引き抜くことができた。この作業をその後数回繰り返し、延べ棒だった銀は直径が1ミリに満たない針金状になった。

次いで、針金状の銀線を丸めて焼き鈍するように先生に言われたので、銀線の両端を手にとって回して見るが、小さく巻きつけることができない。すると4男が

「こうやって指に巻けば良いですよ」と言って人差し指にぐるぐると針金状の銀を巻き付けるような仕草をしてみせてくれた。

それを見て、真似てみると実に簡単に小さく巻き付けることができた。



写真5 ダイスから銀線を引き抜く

次に焼き鈍しを終えると、

4男「それじゃあ、軽く叩いて平らにして」

平らにするという意味が、よく分からないままに軽く叩いてみると、角が取れて長い円柱状になっている針金状の銀に再び面ができていくのがわかった。

#### 《銀板の溶接》

そしてまた焼き鈍しをし終わると、

先生：「じゃあ、この(最初に作っておいた)板の端を、ニッパで真っ直ぐに切って整えて下さい。銀の切れくずを下へ捨てちゃダメですよ。紙の上で切らなくちゃ」

4男：「切って落ちてくる銀を(板を握った手の)中指で受けるようにして切るといいんですよ」

先生：「終わったら、石の枠を石の形に合わせてピンセットで丸めて輪にして下さい」「はい、それでいいです。これをスワッグ(硼砂)と言います。ここの石の皿の上に水を少し入れてホウシャを潰して下さい。それから、この接続するところにホウシャをつけて、銀蠟をおいて下さい。それからランプの炎を吹きかけて溶接します」

筆者が作業を始めるのに、ピンセットを見失って近くにあった先生のピンセットを自分のものかと思い、手を伸ばすと先生に「自分のでやってくださいよ。私のは渡しません」と叱られた。自分の道具を使い終わった後に、しっかり意識して置くことが大事なのかと思う。

ピンセットを見つけ、溶接を始めようとする「火を吹き付けるときには、最初軽く吹いて銀蠟が吹き飛ばないようにして、安定したら強く吹いて銀蠟をちゃんと溶かして下さい」と先生はアドバイスをくれた。

初めは、言われたのに加減がよくわからず、自分の息で銀蠟を吹き飛ばしてしまった。しか

し2度目には要領がわかり、吹き飛ばさないで銀を熱することができた。銀が熱せられ赤くなり始めたときに、銀蠟がさっと溶けて接続面に広がった。「できた。溶接ができた」。水に入れた後、拭きあげて、石の枠は完成した。

#### 《銀線を捻る》

次に先生は面ができている銀線を取り上げ「こうやって捻って下さい」とヤットコで両端を摘んで螺旋状に捻っていった。この時に、ダイスで引き延ばした銀線を一度叩いて面を作った理由が分かった。そのほうが螺旋に角が立ってきれいに見えるのである。これなら簡単そうだと、早速筆者もヤットコを持って捻ってみた(写真6)。初めのうちはよかったが、段々左右で捻りにむらが出てしまった。ここでも結局先生に直してもらった。

そしてまた焼き鈍しするように指示された。

筆者:「なんで焼き鈍しが必要なんですか」

先生:「何度も叩いたり、ひねったり、引っ張ったりすると銀が固くなってしまいます。それでちぎれてしまったりするんですよ。熱するとまた柔らかくなるから、また叩いても平気になるんですよ」

こんなやりとりの後、もう一つ銀線を作るように言われる。

先程と同じように、予め細く叩き延ばした銀をダイスに入れて銀を引っ張ったが、またちぎれる。すると友人に「引っ張っていてきつくなったら油をつけなくちゃ」と言われ、そうしてみるが、また針金がちぎれてしまった。銀がダイスの穴にも入らなくなってしまい困っていると、この頃学校から帰ってきたD氏の子に「針金の端をこうやってヤスリをかけてもいいんですよ」と助言をもらう。そしてヤスリをその場でかけ始めると友人が「銀や真鍮、どんな金



写真6 銀線を捻る



属でもこうやってどこでもヤスリをかけていいんだけど、金の時だけはいちいち引き出しの上で削って粉を集めなくてはならないんですよ」と教えてくれた。僅かな粉でもつもれば安いものではない。その他にも、仕事が終わった後、掃いて集めた土はまとめておくそうである。1、2週間に一度、その土を買いに来るインド系の商人がいるそうで、彼らはそれから金を仕分けて商売にしているという。

2本目の銀線ができると「じゃあ、これだけ(8 cm)切ってから、叩いて平らにしてください」との指示。その後、焼き鈍ししてからまた捻りを入れたが、自分で見て今度は前回よりはまし、という程度の仕上がりがだった。

そして焼き鈍しの後、水に銀線を入れようとする、先生に「小さい銀だったら手にとってフーフー吹きながらもんでも冷めるよ」といわれ、それまで熱された金属に必要以上に恐れていた自分に気付く。

#### 《銀線を石の枠に巻きつける》

先生は捻った銀線を石の枠に巻き付けてから、「溶接の仕方わかりますか?」と確認してきた。筆者は、溶接の仕方は先程やったので大体わかったと思い「はい」と答え、溶接を始めようとするが、銀蠟片が無くなったので、銀蠟の固まりを金槌で叩き延ばすが、銀蠟が金槌にくっついて飛んでしまう。それを見た先生は「銀蠟を叩くときには金槌の頭に手を当てて強く叩くといいんですよ」と教えてくれた。

そして、銀蠟を切ろうとする友人に「ニツパで細かいものを切るときには、手を開いて切ると飛んでいってしまうから指で包むようにして切らない」と弟さんに指摘されたことを、また別の表現で言われた。

先生は「溶接は、よくできました」と初めて誉めてくれた。そして「もう一本捻った銀線を石の枠に溶接して下さい」「指輪の足(輪部分)をつけるから、枠の下のところは少しあけてね」と筆者に指示し、しばらくこちらの様子を見ていた。

筆者が溶接をするのに、自分で細かく切った銀蠟を手にとると「溶接するときに先ずスワッグをつけないといけません。それから銀蠟です」と手順を正された。

まわりで様子を見ていたD氏の子供達も見ていてじれったくなったのか「石の枠を木片の上において、それから銀蠟を周りにつけて、先ず火は軽く吹くんです。それからパーッと強く吹くと銀蠟がサーッと広がって溶けるんです」と教えてくれた。すると、すかさず先生は、子供達に向かって「お前たちは教えちゃダメだぞ。自分のアイディアを出して工夫しないとダメなんだ」を叱りつけた。

溶接するのに捻った銀線を石の枠に当てて長さを合わせ切って見たが、少し大きいような感じだったので「もう少し余分に切らないといけませんか?」と訊くと、先生は石の枠に針金を当てて「石の枠がゆがんでいるから、合わないんですよ」と言って小さなピンセットで調節してくれた。そして溶接が終わると先生が「ちゃんと溶接できていないところがある。そこにもう一度銀蠟をつけて溶接して」とチェックし、指示してくれた。

子供：「おじさん、四方にバーッと吹いて下さい。銀蠟が溶けて広がるように」

筆者：「はい」

子供：「おじさんはいつ指輪が出来上がると思いますか？」

筆者：「わかりません」

こんなやりとりがあったが、何とか石の枠と飾り付けまで漕ぎ着けることができた。

この時夕方6時45分。

先生：「もう暗くなったから自分の指輪の部品を1カ所に集めて」

筆者：「はい」

### 《指輪の足を作る》

翌日、11時に作業開始。

先生：「指輪の足(輪の部分)は簡単なのにする？ それとも難しいの？ 単純なデザインのは簡単だし、いいデザインのは難しいですよ。あなたは中程度のを作るといいでしょう」

そして「リングの端に切れ目を入れてもいいし、簡単なのはこういった型にはめるんです。」と言って色々な模様の入った型を見せてくれた。

筆者：「型にはめて作ってみます」

先生：「うん、それがいいですね」「その他に、石の枠が歪んでいるから、石が落ちないように枠の底に石を受ける輪をつけましょう」

筆者：「はい」

余っていた銀線を渡され、それをラジオペンチで丸めてから叩いて輪にした。しかし、叩き過ぎて、輪は大きくなり石の枠の中に入らなくなってしまった。そこで先生に許可を得てから、石の枠を少し開いて入れようとしたが、大きくしすぎると石が落ちるようになってしまうと言うことで、2,3度枠を少し開いては輪を押し込んでみるという作業を慎重に繰り返した。しかし、慎重にやりすぎたせいか、うまくいかなかったので、結局また先生が仕上げることになった。

輪を焼き鈍してから、先生に渡すとあっという間に石の枠の底にはめ込んでしまった。それに驚いていると、

先生：「固くなってしまっているのを焼きなおして柔らかくしたから、あっさりに入ったんですよ。これで石が落ちませんよ」「ほら、見て下さい。これをもう少し中に入れたほうがいいでしょう。後は自分でやって下さい」

友人のお母さんが様子を見にやってきた。

そして「自分のお父さんやお爺さんがやっていない仕事をなんて早く習ってしまうんでしょう。随分うまく指輪を作りましたね」「4カ月習えば、全部の仕事覚えてしまうでしょう」と筆者を持ち上げ励ましてくれた。

### 《指輪の足を型にはめる》

先生が指輪の足の端の模様の型を持ってきて見せてくれた。

先生：「どれがいいですか？」

しばらく見てから「これにします」とちょっと大きくて派手なデザインのものを選んだ。

先生：「指輪のサイズを見るのにリングサイズ(プラスチック製の各サイズのリングをまとめたもの)を使って下さい。それでどれが合うか選んで下さい」

色々なサイズのリングを指にはめて試していたが、そのうちに抜けなくなってしまった。

すると先生は「そういう時には手前(指輪より身体よりの)の皮膚を引っ張って。そうすれば簡単に抜けるから」と言いながら抜いてくれた。

そして抜いた指輪のサイズを見て先生は「あなたには17号がいいでしょう」と言って指輪を選んでくれた。はめてみると確かに丁度よかった。

先生は17号のリングをリングロッドにはめると、17号リングの留まった位置に印を付けて抜いた。そして銀をリングロッドの印を付けたところに合わせて、石の枠の分と叩いて延びる分を計算して切った。

先生：「真ん中の部分は叩いて、ある程度延ばさなくてはならないけど、端は模様の型にはめるから、叩かないでおいて下さい。できますか?」

「やってみます」また鍛造をやらせて貰えると喜んで、筆者は挑戦した。「初めの頃よりはだいいぶましになった、点の感覚を保ちながらやれば何とかなるのでは」などと思いながら始めたが、叩き続けるうちに、曲がってしまい、焼き鈍し、叩き直しても修正しきれなかった。

先生は「ちょっと壊れてしまいましたね。でも大丈夫」と言って、すぐに真っ直ぐに打ち直してくれた。

そして焼き鈍してから、

先生：「指輪の足の模様のために型(タッパ)にはめて動かないようにしっかり止めてから強く叩くんですよ。片方は私がやるから、もう片方はあなたがやって下さい」

これで失敗したら指輪が台無しになるのではと緊張するが、先生のように思い切って叩いてみる。おそろおそろ型からはずして見せると、先生は「端はこれでできたけど、真ん中はどうしたらいいと思う?」と訊いてきた。

筆者：「他の道具を使うんでしょう」

先生：「そう、型(キダキダ)にはめて叩くんです」

筆者は端と同じ要領で型にはめて、金槌で叩いた。

#### 《ヤスリがけと溶接》

指輪の足を型からはずして先生に見せると、

先生：「型の外にはみ出た部分をニッパで切って、それが終わったら模様を壊さないようにヤスリをかけて下さい」

削る加減が、叩くのよりもわかりやすかったので、ヤスリがけは、それまでの鍛金の作業よりも気軽にできた。最後に先生にチェックしてもらうところまでは、手本を見せてもらうこともなく、自分一人で仕上げることができた。この時友人が「ヤスリがけは上手いね、何か経験があるんでしょう?」と訊いてきたので、自分が子供の頃実家の合い鍵を削って遊んだりして

いたことを思い出した。それでもチェックで先生に見せると「よくできているけどちょっと一カ所深く削り過ぎですね」と言って直された。

そしてリングロッドにはめて丸めた指輪の足を、筆者が指にはめてみると、

先生：「ちょっと大きいな。真ん中を切って短くして、またきれいに溶接しないといけませんね」

先生は長さを調整して指輪の足を真ん中で切った。

溶接するのに銀蠟が足らず、筆者は新しい銀蠟の固まりをもらって、それを叩き延ばそうとしたが、銀蠟が小さすぎて金床の上にそれまでやってきたように指でうまく固定できずにいた。すると先生が「そうじゃなくて、親指の爪でおさえて打つといいですよ」とコツを教えてくれた。筆者は作業の一つ一つに細かいコツがあるものと思った。

筆者：「銀蠟を打ち終わりました」

先生：「じゃあ、クッタの切った部分を目立たないように溶接して下さい」

ところが、溶接部分が大きいのでそれに合わせて大きく切った銀蠟がなかなか溶けず、パイプから息を送るのに疲れていると

弟：「ランプを机の上に置いて吹くといいですよ。そうすれば簡単だから」と教えてくれた。それまでランプを手に持って、木片を台に置いて作業していたのだ。なるほど格好一つで随分吹きやすくなった。

筆者が先生に「やっと溶けました」と指輪の足を見せると、

先生：「ちゃんとくっついたから、ヤスリかけて凸凹を直して下さい」「それから石の枠の底にはめた輪に端2カ所だけ銀蠟をつけて溶接しましょう」

筆者が溶接すると溶けた銀蠟が全体に広がって、全体が溶接されてしまった。そのために、石と輪の間にできた隙間を輪を曲げて埋めることができなくなってしまった。

先生：「銀蠟が多すぎたから全部くっついてしまいました」

結局もう一つ小さな銀線を石の枠の中に溶接して石がガタガタ動かないようにした。

先生：「いよいよ石の枠と足をつけますよ」「まず、足をリングロッドに当てて曲げます。こうやって木槌で打たないと足が凸凹になってしまいます。それができたら、この指輪の足を片方に一つずつ銀蠟をつけて仮止めして、全体に銀蠟をつけて溶接します」

ここでは、やはり銀蠟が大きくて溶かすのに時間がかかったが、何とか問題なく溶接できて、溶接には慣れてきたと少し自信が持てるようになってきた。

### 《仕上げ》

先生：「最後に石を固定するのに石の枠に切り込みを入れるけど、どんなデザインがいいですか？」

筆者：「うーん、どういうデザインがあるかも知らないし...」

先生：「じゃあ、今日のところはニッパで切れ込みを入れてつくりましょう」

先生はそう言って枠をギザギザに切っていく、しばらくすると筆者に指輪を渡してくれたが、



筆者が恐る恐る切れこみを入れていると、結局先生が手を貸してくれて終わった。

先生：「ついにできました。良くできましたよ」

筆者：「こんなにいいものができるとは思っていませんでした」

先生：「じゃあ、後は何をしよう？」

筆者：「磨くんでしょう？」

先生：「そうです。指輪を塩酸に入れて、硼砂が溶けるまで5～10分置かないといけません。

20分間指輪を塩酸に入れておく。そして塩酸から指輪を出してワイヤーブラシで磨きを入れる。

しばらくすると先生は植物の種を出してきて「これをリタっていうんです。これを水に浸けてから、こすると泡が出るんです。ほらこんな風に。これをブラシにつけて指輪を磨くんです」と言って磨いて見せてくれた。

そして私も先生同様指輪を磨いた。指輪がどんどんピカピカになっていくのにつれて、感慨も深まっていった。

リタでの磨きが終わると先生はブリック(何でできているのか不明)というものでさらに磨きをかけて仕上げてくれた。

先生：「石を入れて、さあ指輪をはめてみて下さい」

筆者：「すごい。こんな立派な指輪が出来て。先生有り難うございます。」

4男：「これであなたもスナールになりましたね」

3時40分、指輪完成(写真7)。

指輪ができあがってから、友人に筆者と先生達の会話を記録してきて何か思うところがあったかどうか訊いてみた。

友人：「なんだかあなたが作っているのをみていて、自分もまた作ってみたいくなりました。それと正直言って、あなたが思ったより仕事を早く覚えるので驚きました。お兄さんが言っていた通り随分集中力があるんですね。それに日本では学校で工作を習うそうだから、その経験も関係あるのかもしれませんが。ネパールでは学校で工作は全く教えませんから自分たちのように家でやらなければ、全く工作する機会なんてないですよ。今回一緒に協力してきて自分としても楽しかったです。今まで自分では小さい頃からいつの間にか出来るようになっていたから、気が付かないでいた細かい技術が沢山あるんだということに気が付いて新鮮でしたから。」

そして「子供の頃から遊びながら自然に覚えていくから、特別に何か教わるといったことがないんです」と付け加えた。

先生：「お父さん、こういうふうに分たち持っている技術を全部書き留めたらすごく厚い本が出来るね。」

D氏：「ああ、そうだな、何冊もできる」



写真7 完成した指輪

友人が筆者に向かって：「あなたの感想はどうですか？」

筆者：「初めから無理かなとは思っていたけど、やっぱりほとんどの工程を先生にやってもらうことになってしまって申し訳なかったです。結局自分でできるようになったのは焼き鈍しと簡単な溶接ぐらいですね。でもとてもよい経験をさせてもらって楽しかったです。特に銀を叩き延ばすのは一番難しかったけれど、逆に一番やりがいもありました。思い通りの形に色々作れるようになったらどんなにか楽しいでしょうね」

友人：「子供にも初めは焼き鈍しをやらせるんですよ。大人の手伝いで。あと残った真鍮の屑を遊びで叩いたりして鍛金は自然とおぼえていくんです。それで、思い通りに成型できるようになると、学校なんかそっちのけで指輪を作りたがります」

## 7. 商人としての先生

指輪が出来上がってから4日間家や村で色々とお話を伺ったり、村をまわっていたりして過ごしていたのだが、その間に一度お客さんが来るからと言って家中とても緊張した空気が漂ったことがあった。商売上のお客さんだというのに住居の中に通し、部屋に鍵をしてD氏と先生は話しをしていたが、お客さんが帰ってからそっと話しをしてくれた。「金を売りにきたんですよ。ちょっと見てみる？」と先生は言いながら、部屋の中に置いてある包みを指差し

た。領いて部屋に入り、その中を見せてもらうと金貨と宝石が散りばめられたペンダントが入っていた。D氏と先生はその金貨と宝石が本物かどうか、もしそうだったらいくらかの価値があって、偽物だったらいくらになるのかなどと議論していた。訊くと、これを持ってきたのはインドへの出稼ぎから帰った人で、ヤミで流れた商品を手に入れたものらしい。結局D氏は翌日金貨とペンダントを金と宝石の質(色見本などを見て判断)を見てから、重さで買い取った。後で町や都市に持って行って売るといふ。そしてこういった種類の金銀の商売はときどきあるもので、うまくいけば大きな利益になると2人は興奮気味に続けた。

彼らは金銀細工の職人であると同時に貴金属商でもあるのだと筆者はこの時初めて実感したのである。そして友人がタンセンから村に向かうときに話してくれたことを思いだした。金細工職人と鉄鍛冶職人とで何がどう違っていると思いますかと尋ねた時のことだった

友人：「自分たちと他の金属加工をする職人とを比べると、自分たちが金や銀などの高価なものを扱っているだけ、チャラク(知的、狡賢い)だと思う。それで実際金持ちになっている部分もあるしね」「父は、小さい頃からよく金を売るときの微妙なごまかし方のテクニックを教えてくれたんですよ。ある時には金を溶かしたときに少しだけサッと床に落として、すかさず足で踏んで隠したんです。溶けた金だから熱いの何のって。涙がぼろぼろ出てきたそうです。そうしたら、怪訝に思ったお客さんが、どうしたんだ、何で泣いているんだって訊くから、『私の母が病気で心配で心配で』と父は言って誤魔化したんだそうです。そんなような話はよく聞かされたなあ」

その後、D氏と先生は日本での金銀の商売の可能性はどうかといった話題に移り、そういつたことに関する知識をほとんど持たない筆者は困惑しつつも、改めて商人としての2人の逞しさを感じたのだった。

## 8. 指輪作りの場と職人としての主体

ここまで指輪作りの場を細かく記述してきたが、そこでは以下に述べるような知識と理解、身体の獲得が求められていたように思う。

1) 指輪作りの道具の名称についての知識、その使い方に関する知識、それを意識、無意識的に使いこなす身体の獲得。指輪作りの工程に対する理解。指輪の部品の作り方、つまり銀の掴み方、叩き方、引き延ばし方、焼き鈍し方、切り方、溶接のし方、サイズの測り方、部品の組立て方、削り方、磨き方に対する知識とそれぞれの作業をおこなうことができる身体の獲得といった指輪作りそのものに関するもの。

2) 指輪の販売を含めた金や銀などといった貴金属の売買をおこない利益を上げるための知識と機転。

3) 以上のような知識や身体の獲得を教授・学習する上で必要になる関係のあり方としての家族内関係や親族関係に関する知識とそこでの適切な態度を実践するための知識と身体の獲得。

4) 1), 2)を内包するスナールカーストとしての社会的立場の知識と振る舞い。

今回の事例からは、これらの知識、理解や身体を獲得が、金銀細工職人としての主体形成の根本となる記憶の共有の場を成り立たせている要素だということがわかった。もちろん特殊な弟子入りのかたちで始められ極めて初歩的な作業に限られた経験からではあるので、まだまだ追加すべき要素が多いのは間違いない。しかし、これらの内容自体は指輪作りの性格上そう変わらないもので、かなり一般的なものだと言えるのではないだろうか。

では、このような知識、理解や身体を獲得した後どのような状況で職人としての主体が立ち上がるのだろうか。職人というにはあつかましいが筆者の場合、指輪作りの経験を経てしばらくの間、自分が変わったなと感じることがよくあった。というのは、他の金属製品を見たときに、それまではただ完成された製品としてしか見ていなかったものを、無意識のうちにその製造方法もイメージするようになったのである。指輪だけでなく、プレスレットなど他の装飾品、そして家電の部品などほとんどの金属製品についてその製造方法を推測するようになった。そしてそんなとき、指輪作りを習った自分を強く感じた。

さらに、家で包丁を砥石で研いだ時に、余り切れるようにならなかったのもっとよく研ぐにはどうしたらいいのか悩んだ時に、鍛金の時に思いついた「点の感覚」を思い出し、その感覚を当てはめて研ぎなおしてみた。すると格段に切れ味よく研げた。この時には銀を叩いたときの手の感触や指輪作りの記憶が強く蘇るとともに金細工を習った人間としてのアイデンティティを強く感じた。

D氏の弟である友人の場合は少々異なっている。金銀細工を子供の頃からやってきたことで何か自分の中に他の人との違いを感じるところがあるか訊いてみたところ、現在物理学の講師である彼は、「子供の頃から理科が得意だったんだけど、それは金銀細工をするときに手順や構造を考えることで論理的な思考が鍛えられてきたからだと思っていたし、今も物理の実験を組み立てる時にそう思うことがあります。工業技術院にいたときにも工具の使い方や物の作り方に対する感覚が他の人たちより優れていたのも、仕事が随分覚えやすかったと思う」と語ってくれた。

これらの例からわかるのは、指輪作りの経験の要素を何らかの行為に生かした事に気付いたり、思い出して問題を解決しようとするときに職人としての主体が立ち上がるということである<sup>3)</sup>。そして指輪作りの経験の諸要素のうち、どれが展開されるのかは当事者の置かれた歴史や状況によって異なるようである。

では、友人の例もその1つに含まれると考えられるが、職人文化が「近代」という状況に出会ったとき、どのように展開されるのだろうか。今後はさらに経験と知識を重ね職人文化の深さをさらに追求しつつ、工場を経営する企業家や労働者の方々への聞き取り調査を進め、近代化と職人文化との関係について追求していきたい。

## 9. 日本の彫金師との比較

日本で銀の彫金をしている叔母に今回の指輪作りの経験を話してみた。叔母は、自分は学校



で習ったこと、焼き鈍しにガスバーナーを使うこと、そして、銀は板や線に加工済みのものも手に入れられることが日本の場合と違うかなと話してくれた。

さらに貴金属を扱う貴金属商としてのネパールの職人の話をしたのだが、このとき筆者は日本で彫金師はそういったことはあまりしないだろうし、あっても少なくともそういった側面を誇らしく話したりはしないだろうから、偏見を生まないようにと考え、ネパールではデザイン料が貰えなくて、そうやって金をごまかしたりしないと実際商売として成り立たせるのに大変なところもあるのだと付け加えた。

それを聴いて何となくわかったことがある、と叔母は言う。何のことかと訊くと、実は先日知人がインドネシアで銀製だと言って買ってきた指輪の修理を頼まれて酸に入れたところ、銀のメッキが剥がれてしまい、銀製だというのが嘘だということがわかって、とてもがっかりしたのだと言う。同じ彫金師としてこんなことをされると自分もおとしめられたような気がしてショックだったのだと。でもデザイン料が貰えないこと、金をごまかさないと大きな利益を生めないことを思うとそもそも前提が違って仕方がないのかと思えた、と続けた。自分の場合は服を見る時にも彫金との相性で見たりする位普段から彫金のデザインを考えているし、自分で考えたデザインをほめられるのが一番嬉しいと言い、さらにやはりデザインで評価してもらって彫金を続けていると思っているから、と話を締めくくった。

このように少ない資料からだが、ネパールでは金銀細工職人として金銀細工のうまさ、そして貴金属商として多少の誤魔化しをしながらでも商売をうまくやっていく才覚<sup>2</sup>が求められ、そういった中で職人としての主体が形成されている一方、日本の彫金師の場合はアーティストとしてデザイン力が求められ、そこで主体が形成されているということが言えると思う。

ではこのような違いは何から生じているのだろうか。まず素材の加工や道具の問題がそれに影響している可能性を指摘できる。つまり、ネパールの場合は、素材となる金銀の板や線などへの基本的な加工が求められるのに対して、日本では加工済みの素材を手に入れることができるのである。このような状況では、仕上がりの良さなどの技術の重要性が低下し、デザインの問題が重要になってくるのも不思議ではない。さらに、誤魔化して利益を得るということに対する日本とネパールの間の意味の違いも影響している可能性が指摘できる。

いづれにせよ、これらの点だけからこうした差異の形成についてを明らかにすることはできない。ここでさらにこの問題について追求するだけの準備はないが、その裏にはデザインを個人的なものとし意匠化するの環境の違いがあるのは間違いない。そしてその環境の違いは、社会の近代化の問題と密接に絡み合っているはずである。こうした問題も今後の明らかにしていくべき課題となる。

## 謝 辞

著者と本研究の母体であるアジアの職人文化と近代化研究会に導いて下さったのは、同研究会のメンバーでプロジェクトの半ばで無念にも亡くなられた故田村真知子さんである。真知子

さんが御声をかけて下さらなかつたら、この研究はおそらくまだ手をつけることもできていなかったであろう。

本稿のもとになった指輪作りの経験をさせていただく上で、またその時の記録を取る上では、共同研究者の Lok Bahadur Baral 氏と彼の御家族、とりわけ指輪作りを指導して下さった Soman Sing Sunar, Laksiman Baral の両氏に並々ならぬお世話になった。彼らの協力なしには弟子入りの企画自体初めから成り立たなかった。

叔母の小林京子さんはネパールの指輪作りの話を親身になってよく聴いて下さった上、自らの彫金師としての貴重な御感想も寄せて下さった。

サントリー文化財団からは本研究の母体「職人文化と近代化」研究会に対し研究助成金を頂いた。本研究にかかった費用の一部はその助成金によってまかなわれた。

まだ端緒についたばかりの本研究だが、こうしてまがりなりにもかたちにすることができたのはこうした方々の御助力と、さらに研究会のメンバーの方々や発表の機会を与えて下さった ICU アジア文化研究所の皆さんのお陰である。ここに記してお礼を申し上げたい。

## 注

- 1) ただし各作業が職人としての主体形成に与える重みは、それぞれで違っているように思える。筆者の場合、銀を叩き伸ばす作業がうまくいった時の身体の感触がもっとも強く記憶に残り「できるようになりたい、できたらいいだろう」と自己に強く訴えかけてくる作業だった。ついで、焼き鈍しや溶接の時の火のコントロールの感覚が記憶に強く残っていて、後の作業の印象は比較的弱かった。これには筆者の個性も関わっているのかもしれないが、ある程度一般化されうると思える。というのは、習い初めの子供も銀をうまく叩けて思い通りに成型できるようになると学校そっちのけでやりたがるという話もあったし、どちらも作業として絶対的に微妙な感覚を要する複雑な作業で、さらに言葉でやり方を説明しにくいので、殆どの人にとっては試行錯誤を繰り返す必要があって何度も自己の身体を排除を繰り返し、それと同時に主体の生成も繰り返しおこなわれるからである。これは生田(1987, 1995)が言う「形」と「型」の違いとも重なってくる問題である。いずれにせよ、これらの作業による主体形成の度合いの違いは今後求められるべき課題である。
- 2) D 氏のように誠実さが人から評価されることもあるが、これは誤魔化しが日常的であることの裏返しであるとも考えられる。
- 3) このような過程で生じる主体は、田辺(1989)の論じる「儀礼のなかで演じられる主体」とは「呼びかけ」を必要としない点でそのあり方が大きく異なっている。この2つの異なる「主体」の差異や位置関係の解明は、今後「職人文化」について、さらにはイデオロギー論について考察していく上で重要なポイントになると考えられる。

## 引用文献

- 生田久美子、1987、「『わざ』から知る」、東京大学出版会  
福島真人編、1995、「身体の構築学」、ひつじ書房  
田辺繁治編、1989、「人類学的認識の冒険——イデオロギーとプラクティス——」、同文館